

週1度発行される蘇州の地方紙“名城早報”の蘇州で注目される人物を紹介するコーナーに楊先生が紹介されました。

— 記事内容（日本語訳） —

楊敢峰

1970年、江蘇省蘇州太倉市生まれ、日本筑波大学修士課程終了剣道専攻。楊敢峰氏の生涯の夢は二つ。一つは健康で120歳まで生きること。もう一つは武道精神を普及させ、中国に世界一流の武術大学を創設すること。

楊敢峰：私は剣道狂

人は息を吸う時、銃身に弾を詰換えるのと同じで（詰めている時は撃てない）、一番弱くなるのだそうです。剣道の名手は相手の呼吸を感じとることができ、相手が息を吸って最も弱くなったその一瞬に一本を取るのです。しかし、攻撃は剣道の目的の核心ではありません。剣道で一番重んずる点は、武道家としての精神修養なのです。

題名の「狂」には中国語でいろいろな意味がありますが、ここでは「張牙舞爪」（牙をむき出し爪をふる：威力を見せつける）といった意味の「狂」ではなく、人生の全ての中で自分が一番やりたいことを一心不乱に行うという意味の「狂」です。常人には考えられないくらい剣道が生活そのものになっている状態。傍から見れば「苦行僧」にも見えますが、でも楊敢峰氏はそんな生活を楽しみ、その様子は石の上を流れる清らかな泉のように純粹です。



Q&A

1. 一番怖いものは？
することがないこと
2. 最も尊敬する人は？
恩師
3. 他の人がすることで一番いやなことは？
時間を守らないこと
4. 生涯で最愛の人は？
妻
5. 一番大事な財産は？
友情
6. 最も好きな女性の資質は？
善良
7. 友人のどこを一番重視しますか？
信用
8. どんなふうに死にたいですか？
自分の念願をかなえて
微笑みながら死にたい
9. あなたの座右の銘は？
「持之以恒 永不放棄」
(やっていることを続け、決してやめない)

「苦い禅」

それは生活の中でできる一種の修行

まだ生徒が来ていない、数百平米の遮るものがない広々とした蘇州市新区の竹園剣道館で、T シャツとGパン姿の楊敢峰氏は私に剣道人生について話し始めました。インタビューの冒頭、私は氏を紹介した日本の雑誌の記事に眼を奪われたのですが、そこに掲載された写真の氏はまるで20年前の譚詠麟（香港の俳優）のようでした。

楊敢峰氏は少し天然パーマがかかった短髪で、ほっそりした面差しの、一見すると真面目な文学青年。もし、半袖から出ている筋骨隆々とした腕と一般の人とは違う落ち着いた話し方でなければ、氏が街中を歩いていたとしても、誰も修練をつんだ剣道の名手だと容易に信じないでしょう。

楊敢峰氏はもと蘇州大学の体育教師で、その時すでに中国の格闘技、散打の達人でした。武術を教えているうちにこのままでいいのか、という戸惑いにぶつかり、日本に留学して茨城県筑波大学で剣道を学ぶ道を選びました。これが剣道との出会いです。留学期間、当初こそ生活が厳しかったものの、生活が長くなるにつれ次第に企業等から太極拳や剣道の練習方法についての講演の依頼がくるようになり、講演料で生活も楽になりました。でも氏は、当初の苦学生のような極限の生活を変えようとはしませんでした。

全額奨学金を得て、講演料をもらえるようになってからも、冬休みには毎日ほんの何時間かしか寝ないような身体を酷使する生活を送りました。毎日午前10時から午後5時までホテルのレストランで鍋運びや鍋洗い。家に帰って晩御飯を食べ、少し寝て、夜8時半に起きて「宅急便」の会社で翌朝届ける速達便の仕分けの仕事。夜中の2時に車を運転して家に帰り、コーヒーを一杯。3時からオートバイで新聞配達の仕事に。チラシを新聞一部ずつに自分で挟み、それを持って配達。配達時にはわざとエレベーターは使わない。配り終わって家に帰るのは朝6時。3時間ほど寝てまた10時にはホテルで鍋洗い。その繰り返し。

このような極限の生活が1ヶ月あまり続きました。楊敢峰氏はこのように極端な「自討苦喫」（自ら求めて苦勞をする）の生活方式を一種の修行、生活の中の「苦い禅」とみなしました。日本に来てから6年後、氏は剣道を広めるために中国に戻る決心をしました。新区で武道館を開き、剣道と太極拳を教えています。

苦行僧にもあるおもしろい一面

楊敢峰氏が言うには、剣道で自分が一番心引かれる点は、剣道が正々堂々とした男の武道であること。剣道練習中は、自分の名前のついた剣道着を着て重い防具をつけ、攻撃に出る前には構えをし、剣を出すと同時に大声で攻撃する部位を言う。達人に言わせると、剣道は集中力と心の勝負であり、普通の剣道練習者にとっては、稽古中大声を出し、踏み込み、攻撃することは、仕事上のストレスを解消する最善の方法です。

楊敢峰氏は今、今年8月にブラジルで開催される第14回世界剣道大会の準備に入っており、現在すでに苦しい練習の日々を始めています。スケジュール表には毎日午前中3時間の太極拳教授と1時間の自己練習、午後は30分休みなしの縄跳び、200回の剣道早素振り、200回の正面素振りが書き込まれており、この他にも、毎週火、木、土曜日の武道館での授業の折には、蘇州在住の日本人の剣道の先生達と地稽古（試合形式の練習）を繰り返しています。毎日の日程の中にはどんな娯楽もありません。氏に言わせると、遊びたいとも思わないし、そんな必要もないそうです。

私には楊敢峰氏が都会の中にいる恐竜よりも珍しい中世の苦行僧のように思えますが、そんな氏でも夜11時過ぎにはちょっとテレビを見る、と聞くとなんとなくホッとします。

楊敢峰氏にはまたおもしろい一面もあります。氏が面白がって話すには、テレビドラマ「再婚しましょう」に脇役の一人として出演したとのこと。「どれが私かわかりますか？」と聞いた後、演じたのは一人の編集者だと教えてくれ、台詞はそんなになかったけれど十分楽しかったと言っていました。

インタビューの終わりに、楊敢峰氏は私に、実際に防具をつけ竹刀を手にして剣道を体感してごらんさい、と強く勧めました。自分で身を以って体験しなければ剣道のことをよく書けないだろうと。私がなんとも煩わしい防具を身につけた後、氏は「光速」（実際はゆっくり打ったのですが）で私の頭に「面」を打ちおろしました。そして「どう？ 気持ちいいでしょ？」と私の驚いている眼を見ながら聞くのです。氏が自ら答えるには、慣れてくると、防具をつけて竹刀で打たれると実際とても気持ちがいいのだそうです。